

しのある社会を目指そうではないかという提言です。

①パーフェクトを求めず、②自然のものを使い、③不平不満が言える、④不便、⑤行政の発想では生まれない、これらの発想が結実したのが「もりのようちえん」であり「ゴジカラ村」だったと。色々な人と色々なモノが混じって暮らす時にドラマが生まれるのであり、受け身のサービスだけでは役割が生まれない、という気づきは実践者ならではの視点でしょう。



現在2期目の首長として、行政内で何でも解決しようとお金をかけてやるのではなく、民間ではない強味を活かし、わずらわしいことを我慢しつつ、うまくやらずに時間をかけ、多くの市民を巻き込みながら、遠回りをするのが求められている、と気づかれたそうです。長久手市には有名な「たつせがある課」が設置されていますが、たつせがない(役割や居場所がない)の対義語としてイメージされた造語には、市民一人ひとりに役割や居場所があるまちづくり

を進める意気込みが込められたものです。

「たつせがある課」の取り組みの1つに、「地域共生ステーション」の整備があります。これは、小学校区に整備されているもので地域の誰もが集うことのできるコミュニティの場所で現在6カ所となっています。市民の知恵を結集させ、役割分担をし居場所を作っていく上での、1つの実験の場です。長寿社会になり、定年後にも十分に人生の時間が残されている今日において、社会、教育、職場、家庭のあり方を考え直す時期が到来していることから、まちを市民の活躍の場にしてもらい、ゆっくりとスローダウンししながら悩み考え暮らすことで、真の地域共生社会を市民とともに実現していく仕掛けとも言えるでしょう。

役所の仕組みをどう変えるかという点で吉田市長は、まちを小さな単位として職員の地域担当制を敷き、各課の縦割りを打破するための横糸づくりや、女性課長の割合の向上、思いをもって職務にあたるための短期異動の凍結、職員がまちへ出ることの推奨などの構想を持たれています。

これまでの話を端的に示された「遠まわりするほどおおぜいが楽しめ うまくいかないことがあるほどいろんな人に役割がう



まれる」という言葉には、失敗を恐れて事前に地ならししどこからも意見がでないように最短距離で物事を進めるような行政のあり方ではなく、「隙」や「隙間」を作ること
で文句や意見を出しやすくして関心を持たせ、「たつせがある」まちづくりをしていき
たいという、強いメッセージが感じられました。市民からは、「行政が何でもしてくれ
たけれど、市民がやってもいいのですね」という言葉が聞かれるようになったことや、
共生ステーションなどの場もたらす市民活動の活発化など、徐々に成果となり現れて
いるそうです。

本プログラム責任者の平野隆之教授との対談や会場との意見交換では、「もりのよう
ちえん」に現在 23 歳になるお子さんを当時預けていた女性から「幼稚園では親も改革
させてもらい、私たちの価値観も変化した。子育てに迷っている時もその不安を肯定で
きた」との経験が語られました。



旧態的な行政文化を変えていくためにも一方的なト
ップダウンだけではなく、わかりやすく丁寧の下に降
ろし市民の思いをボトムアップする仕掛けとしての地
域担当制や共生ステーションがあること、それらは職
員が市民からの信頼を得る場でもあることについても
議論されました。実務家教員である NPO 暮らしづくり
ネットワーク北芝の池谷氏からも、自身の NPO で地域
担当制を取り効果が得られていることが語られました。

一方でそのイニシアチブを誰が取るか取るべきか、そ
の融合をどのようにしていくかが課題であり、そのためのマネジャー層の役割期待が示
されました。様々な話し合いの場の運営も、「福祉開発マネジャー」の仕事と言えるで
しょう。

会場からは、今の若者たちに昔ながらの価値観だけ
ではなかなか通用しないことや、暮らしの多様性をど
う捉えるか、地域住民にも階層があり誰と話すかが問
われることなどの意見も出されました。最後に、本プロ
グラム開発委員長の穂坂光彦教授から、地域では足が



地についたなかで暮らしていることから地元のペース
を把握し乱さないことへの言及
がなされ、「福祉開発マネジャー」についてもどのような人材育成
をしていくかを考える機会となりました。



プログラムの成果説明では、プログラムが体系化されているこ
とやフィールドワークでの総合作用、オンデマンド講義受講や掲

示板利用などについても説明されました。フィールドワークについては関心も高く、今年度の概要についても写真を交えて紹介しました。

現受講生5名と昨年度の修了生1名が参加してくれたため、それぞれの関心や受講における感想についても語っていただきました。看護師である受講生は「医療・介護・福祉とひとくくりにされてきて、福祉のことをわかっていると思っていたがこの受講でそうではなかったと感じた。定年後どのように生きていくかを考えて受講した」と話してくれました。また、一般企業に勤める受講生からは「福祉のバックグラウンドは仕事上無いが、ソーシャルビジネスに関心があり受講した。行政職、看護師、NPOなど様々な背景を持つ受講生と知り合え話ができることは財産だと感じている。フィールドワークでは、福祉開発マネジャーのモデルにもあり話をすることで、人物像を肌で感じた」と話してくれました。

彼らの参加によって、受講生同士のネットワークの魅力や受講で得た新たな気づきを語ってもらうことができ、昨年度に続きリアリティある情報提供が可能となりました。

以上